

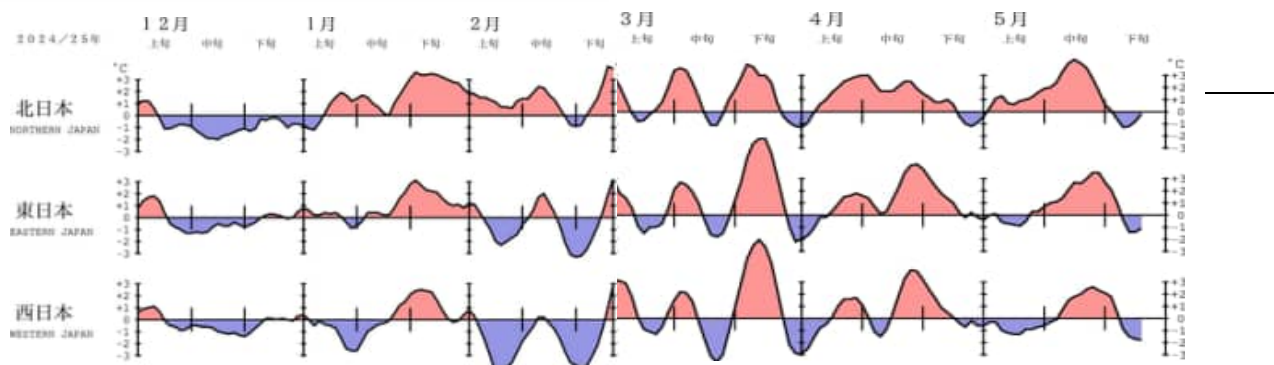
昨年度は自然と文化科向けに従来の「サクラだより」と希望者向けに配信していた私的なメモ・記録を中心とした「花だより」を1本化し、「花だより」にまとめ、11号まで「サクラ」に関連する部分を中心に科内配信するようにして来ました。昨年は科内配信用の「2024 年花だより」は11号の「揚水」に関する記述でTHE ENDといたしました。

本来この「花だより」は、健康維持のための近所歩きとその間に観られた庭木や公園樹の開花を中心とした姿をボケ防止の目的での自身のメモ書きとして始めたものでした。これで脚力維持の近所歩きを止めるわけではなく主治医殿のお勧め通り5年目となりますが続けて来ています。また、最近「記憶力」の衰えを感じてきている「頭」の方の健康維持の為にもメモ書きであるこの「便り」も続けて行けたらと思っています。お邪魔でしょうがお付き合い頂ければ幸いです。また、時には情報やご意見お聞かせ頂ければと思っています。

\*これまでの体験から自然の営みはその年の気温の経過や降水の時期や量の変化で変わってくる  
こと、また「地球温暖化」の影響が身近な自然界にも変異が見られるように感じられます。この意味から本報も観察期間の前後の気象状況から書き下していますが、読み飛ばして下さい。

## 1. これまでの今年の気象経過と今後の予報（気象庁のデーターによる）

### 1-1. 今年の気温経過（平年値との偏差）



上図は奄美・沖縄地域を除く本州の本年度の冬期及び春期気温の平年値との偏差をあらわしています。全般的には冬期・春期の気温は北方ほど高めに推移したことが分かります。地球温暖化の影響は高緯度ほど気温が高くなる傾向があると言われていますが、日本としてその例外ではなさそうです。

・冬季の気温、春先の気温の傾向については前報までに記述して来ていあすので詳述は控えます。予報では5月後半から気温が高くなると発表されていましたが、むしろ低目に推移してきているように思われます。なお、近畿・・・西日本に関しては春期は寒暖が波状となり気温の差の大きな傾向となりました。

### 1-2. 最近の気象経過

先月気象庁の発表した本年5月の近畿地区の気象は「天気は数日の周期で変わり、平年と同様晴れた日が多いでしょう。」

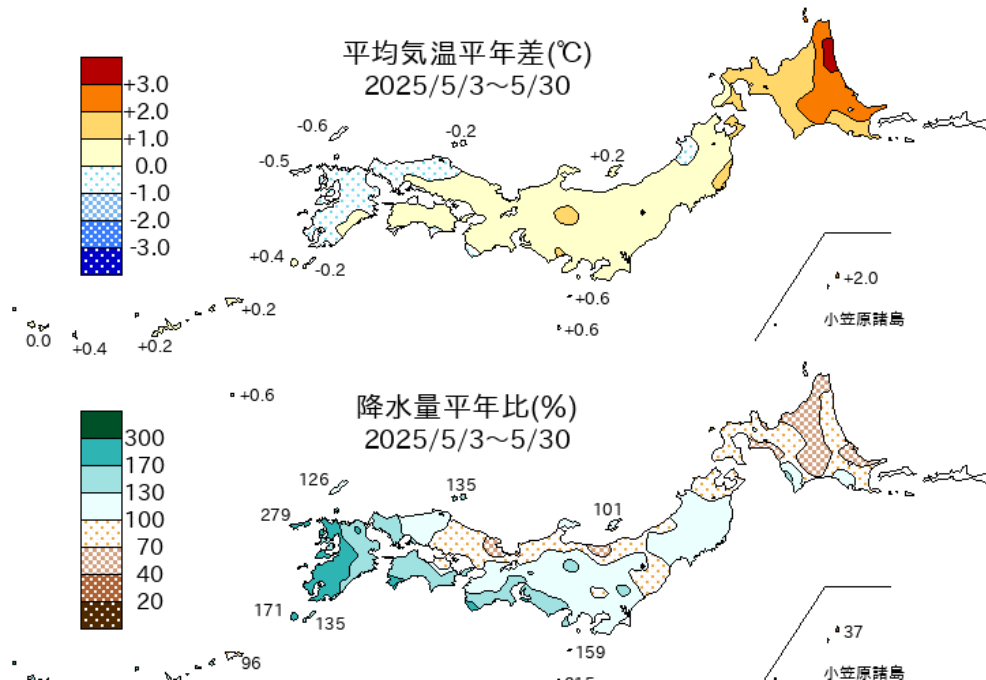
気温：低20、並み40、高40%平年並みかやや高い

降水量：少30、並み40、多30% 平年並み

となっていました・・・。5月の神戸の気温は19.9℃（平年19.8℃）降水量125mm（平年135mm）

ですので、ほぼ予想通りとなったのではないのでしょうか。

なお、気象庁は5月の直近4週間の全国の気温・降水量を下記の図で発表していますので参照下さい。  
近畿地区については均せば平年並みの気温・若干少ない降水量であったことが分かるかと思います。



### 1-3. 向こう3ヶ月間(6月~8月)の天気予報 気象庁5月22日発表

#### \*日本全体の予報

- ・地球温暖化の影響等により、全球で大気全体の温度が高いでしょう。
- ・太平洋熱帯域の海面水温は中部で低く、西部で高い状態が続くでしょう。また、インド洋熱帯域からフィリピンの東方海上にかけて海面水温が高いでしょう。このため、積乱雲の発生はベンガル湾からフィリピンの東にかけて多いでしょう。
- ・これらの影響により、上空の偏西風はユーラシア大陸から日本付近にかけて平年より北の位置を流れやすく、チベット高気圧は平年に比べ北側で強いでしょう。また、太平洋高気圧は平年に比べ日本の南で西への張り出しが強く、本州付近を中心に暖かく湿った空気が流れ込みやすいでしょう。
- ・これらのことから、日本付近は暖かい空気に覆われやすいでしょう。また、本州付近を中心に、梅雨前線の活動が活発となる時期があるでしょう。」と予報されています。

#### \*近畿の3ヶ月予報(大阪管区气象台5月22日発表)

向こう3か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため高いでしょう。

向こう3か月の降水量は、梅雨前線や湿った空気の影響を受けやすいため、平年並か多いでしょう。

\*気温 低10並30高60% 高い見込み

\*降雨量・太平洋側 少20並40多40% 平年並か多い見込み

#### \*月別の予報

6月：平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

気温：低10並30高60% 降水量：少30並30多40%

7月：期間の前半は、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。期間の後半は、平年と同様に晴れの

日が多いでしょう。 気温：低 20 並 30 高 50% 降水量：少 30 並 30 多 40%

8 月：平年と同様に晴れの日が多いでしょう

気温：低 20 並 30 高 50% 降水量：少 30 並 30 多 40%

毎度のことながら、気象の話となってしまいましたが、以下本題の「花」について気の向くままに順不同で書き下して行きます。先報ではサクラ類の他、ホオノキ、ハナミズキ、キリ、ハリエンジュ、エゴノキ、スダジイ、コナラ等を報じてきました。これ等は、身近な樹種であり皆様も眼にされているでしょう。本報ではこの附近で見られ少しは珍しいのでは？と思われる樹の花と、逸出・拡大して来ている草本の花に付いて記述して行こうかなと思っています。

## 2. スモークツリー・グレース

この附近では庭木として、スモークツリーが良く植えられています。緑色（緑白色）の花をつける種も植えられていますが、最近は右のように、濃い紫紅色の葉を広げ、紫紅花の花をつけるが種が多く植えられるようになって来ています。花のみならず葉の色も特異であり、花がつかなくとも葉が濃い紅紫色であり、良く目立つので庭木のアクセントとなるからでしょうか。温種は最近出来た近くの商業施設の庭木として、マルバのユウカリやブラッシュツリーなどと共に植えられています。流行りのオージー系かと思いましたが原産はヨーロッパとのこと。写真の樹は一般のご家庭の庭に植えられている樹高 4 m ほどの樹、一部の枝が突き出しその先に葉と花を付ける樹形が変わっているのが掲載しました。このような枝の突出は最近の異様な気象が影響したのでしょうか。（徒長枝？）



## 3. ニオイシュロラン

ニオイシュロランの和名は花が香り、葉がランに、樹形がシュロに似ることから名付けられたと図鑑には解説されています。かつてはドラセナ属に分類されていたことから、近縁のアツバセンネボクと共に**ドラセナ**と呼ばれていました。ニュージーランドを原産とするキジカクシ科センネボク属の常緑小高木。明治初期に渡来し、芝庭や洋風庭園に利用されて来ている様です。

・葉は剣状で、幹の頂部に多数が密生します。長さ 40 ～ 60 センチ、幅 3 ～ 7 センチで全体に光沢があり、先端は鋭く尖ります。質は革質で、



丈夫な繊維質を持ち、籠や袋の材料となるとの記述があります。

- ・本種は一年中、変化がないように見えますが、5～6月に開花します。花は直径6～7ミリほどの白い小花で、葉の間から伸びた細い花茎に多数集まって咲きます。高い位置に咲くため観賞しづらいが、小花は釣鐘型で、強い芳香があります。花の後には直径4ミリほどの球形の果実が大量にでき、開花翌年の10月頃になると青味を帯びた白色になる。果実にはゴマ粒ほどの種子が3～8個入っており、これを蒔けば増やすことができるが、成長が遅いため庭木として使えるようにするのは15年ほどかかるそうです。
- ・幹は直立するが、樹齢を重ねると枝分かれするようになる。日本での樹高は5m前後だが、原産地では10mを越えて育つ。樹皮は灰白色根元の張りは比較的太く、多肉質の根茎に続く。学名は *Cordyline-australis* で Cordyline は「こん棒」を意味し、太い根茎に由来するとのこと。

#### 4. ユッカ（アツバキミガヨラン）

上記のニオイシュロランによく似ているのが、ユッカ・グロリオサ *Yucca gloriosa* 和名アツバキミガヨランであろう。多分、花がついていなければ両者の区別は難しいのではないかと思います。通称ユッカと呼ばれている樹種は多いようですが、日本で庭園樹として植栽されるのは本種が多いとのこと。

高さ 0.5-2.5m、葉は固く幅 2-3.5cm 長さ 50-70cm で先端は尖っています。花茎は 1m 余り、原種は北米の砂漠地帯に生育。葉は皮膚の炎症を起こすことがあるとのことなので注意が必要。日本へは明治時代に渡来、庭園樹・庭木として利用されています。日本での開花期は 5-6 月または 10 月頃であるとのこと。受粉を媒介するユッカ蛾がないため自然には結実しないといわれています。和名のキミガヨランは学名の *gloriosa*（栄光ある）から「君が代」へ関連付けたものとのこと。住まい近くには数か所の植栽があり温暖化のせい、花をつける樹が増えて来ているように思われます。昨年は秋にも開花したように思います。1mを超える花茎に鈴なりの花をつけるなど、日本種には見られない光景です。



#### 5. グレビレア・ビーチアンドクリーム

この付近でオージー系の樹木の中で、一番多く見かけるのはブラシュ・ツリーですが、最近植栽が増えて来ているのが、「グレビレア」系の花木です。オーストラリア原産のヤマモガシ科の樹木で普通は常緑低木。品種が多くあり、品種によって開花期、樹高、葉の形に違いがあるとのこと。年々暑くなる日本の夏の環境にも合い、手入れも比較的楽で華やかな花が長期間咲くことから、庭木や店舗装飾の植栽としても利用が多くなって来ているようです。

グレビレアの花は画像のようにユニークな形状をし



ています。花卉に見えるのは総苞で、複数の雌しべが飛び出て、くるりと巻いたように開花します。一般に花が蜘蛛のような形に見えることから、スパイダーツリーなどの名称もあるようです。これまでもこの系統の花木を紹介して来ていたと思いますが、写真の種は、今が花が咲き始めた段階で蕾から咲き始めがイエローで、開き始めると桃色に変化していきます。樹高はコンパクトな部類で、1.8m～2.0mほど。花色が大変美しく、耐寒性にも優れているとのことで、住宅の前庭などに路地上されているのが見られるようになって来ています。

## 6. ヒメタイサンボク・リトルジェム

附近に多く植えられているタイサンボクの開花も始まっていますが、これ等に先駆け、次々と花を開いて来ている品種があります。これは北アメリカ原産のリトルジェムと言われる品種。タイサンボクのわい性品種で、普通のタイサンボクよりもコンパクトに育ちます。若木のうちから花をつけ、かなり低いところにある枝にも花が咲かせます。ヒメなどと名付けられていますが、確かに葉は普通のタイサンボクに比べると一回り小さいが、白い花は結構大きくよい香りがします。枝が伸びるにつれて次々と開花して行きます。四季咲き性が強く、春から晩秋までぽつぽつと開花してゆくのが特徴。シンボルツリーとして附近の住宅に1本のみ前庭に植栽されていましたが、最近他所でも若木の植栽を確認しています。なお、本種は自家受粉可能なのか秋には袋果も確認出来ます。(芦屋市・岩園町)



## 7. アスクレピアス (トウワタ)

本種も木本であろうと思っていましたが、分類上は(常緑)多年草となっています。地球温暖化の所為か、従来は草本とは、冬季等気象条件の悪い間は姿を消し、地表面上から新しくシュートを展開するとされて来ました。また、開花結実すればそれで一生を終え枯れるとされてきましたが温暖化の影響かこの区分は怪しくなっています。代表的なのが「クズ」であり分類上は草本とされていますが、冬芽を持ち地上部からシュウトを展開します。木本のツタと変わるところがないようになって来ています。

最近センニンソウ、ボタンヅルなども冬季に葉が枯れることもなく、青い葉を展開している姿が見かけられるようになってきています。このような草本も多くなって来て(常緑)多年生草などという区分が使われてきたのでしょうか? こんな議論は別として、本種はキョウチクトウ科、鮮やかなオレンジや黄色の花を咲かせる野生的な花です。日本では主に2種類が出回っており、赤橙やオレンジと黄色のツートンカラーのクラサヴィカ



は寒さに弱く一年草扱いとされ、オレンジや黄色の花のツベロサは寒さに強く関東以西の暖地では冬越しできるとされています。最近では四季咲き性の強いクラサヴィカをよく見かけるとのこと。多分写真はこの種だと思います。(芦屋市・岩園町)

## 8. フェイジョア

フェイジョア (学名: *Acca sellowiana*) は、フトモモ科の常緑低木。果物として食用に栽培されるといわれるが、この辺りでは庭木として植栽されています。ウルグアイ、パラグアイ、ブラジル南部原産と言われていますが日本の気候にも順応しているのか、最近植栽の増えて来ている樹木です。この辺りでは、5月下旬からあちこちで開花が見られるようになりました。多数ある赤い雄蕊が非常に目立つが、香はほとんどありません。また、原産地では、花粉の媒介者はハチドリだそうですですが、日本では蜂とのこと。外来植物である為か訪問者を見かけたことはありません。



## 9. ピペリカム・ヒドコート

このような品種名を聞いてもどんな花木なのか想像もつかないでしょうが、多分多くの方が目にされていると思います。「タイリンキンシバイ」が和名です。実は、私自身も本品種は単純に「キンシバイ」として認識してきていました。本種は5～6 cmの花を付け平開、5月中頃から開花がみられました。ところが、最近の近所歩きで本種に似ているが枝がたれ気味、花は3 cmほどで殆ど平開しないので別種であろうと調べている内に、こちらこそが本物の「キンシバイ」と分かりました。中国南部～中部の溪谷沿いに生育、枝が長く伸びてたれ気味になること、当年枝の先に3～5個の花を付ける。また、花が平開しないなど。前者に比べると地味。庭園樹には「タイリンキンシバイ」が選ばれているのでしょう。

なお、本種の起源は定かではないが、1920年から1930年にかけてのイングランドで作出されたと考えられているそうです。前述の理由から、庭木や公園樹として普通に用いられえいるようです。キンシバイに比べ樹勢が強いほか、花径も大きく花数も多いため園芸品種として優れているとされています。



・タイリンキンシバイ



・キンシバ

## 10. ランタナ

ランタナ (*Lantana camara*) はクマツヅラ科の常緑小低木。中南米が原産。観賞用に栽培される。和名はシチヘンゲ（七変化）。鮮やかな色の花をつけ、その色が次第に変化することに由来する（初期の花色は黄色、後に紅色になる）。日本にも当初は鑑賞用の庭木として移入されたのであろうが、この附近では野生化、非常な勢いで拡大してきています。本来は熱帯産であり冬季には枯れ、問題はなかったかも知れませんが、温暖化の所為か成木で越冬、5月初旬より空き地は勿論、住宅の垣根や石垣などで右のように開花を始めています。昨年の例では11月ごろまで次々に開花・結実を繰り返しました。花は画像のように美しいので駆除されず、放置されることが多く今年も一層の拡大が心配される種となって来ているようです。



なお、本種は世界の侵略的外来種ワースト 100 (100 of the World's Worst Invasive Alien Species) の国際自然保護連合 (IUCN) の保全委員会が定めた、本来の生育・生息地以外に侵入した外来種の中で、特に生態系や人間活動への影響が大きい生物のリスト。この中で、陸上植物は 34 種が含まれるがこの中には日本産ではクズ、とイタドリ の 2 種がリストアップされている。

因みに上記 34 種の内日本に上陸して見られるのは、このランタナ以外には、エゾミゾハギ、ギンネム、ダンチク、チガヤ、ハリエニシダ（要注意外来生物）、モリシマアカシアが挙げられています。

## 11. アメリカノウゼンカズラ

ノウゼンカズラ自体は古くから知られ、公園などで盛夏にラッパ型の濃いオレンジ色の派手な花をつけ、遠くからでも良く目立ち、初秋まで次々と花をつけるので良く知られている。本種は中国原産のツル性植物で、古くから観賞用に植えられている。「本草和名」(918 年)には既に載っているの、日本への渡来はかなり古い。茎は長く伸び、付着根を出して他の物に吸着して這い上る。

このノウゼンカズラに代わり、近年、よく栽培されている近縁種のアメリカノウゼンカズラである。花の赤みが濃く、筒部が長い。トランペットの広がり小さいので、別名コノウゼンカズラとも呼ばれている。北アメリカ原産で、ケンタッキー州の州花。ツル性なので、何かにからませて栽培する。本種は樹勢が非常に強く丈夫な花木であり、地下茎を伸ばし葉を周囲に芽生えさせ、繁殖します。現在でも園芸品種として通販等では盛んに広告が出されていますが、一方では、地下茎を伸ばし繁殖



力が極めて旺盛である為、庭には植えてはいけない種とも言われている種です。

この辺りでも空き家の壁や、フェンスに取りつき、また空き地を占拠するなど野生化が目立つ存在となってきました。また、5月末というのに上のように開花も見られています。

温暖化の所為かランタナと共に厄介なお客さんになりつつあるように思われます。

## 1 2. バイカウツギ

バイカウツギ (*Philadelphus satsumi*) とはアジサイ科バイカウツギ属の落葉低木。山地や丘陵の林内に生え、庭木にもされる。和名の由来はウメに似た白色の花を咲かせることから、「梅花」とされたとのこと。

落葉広葉の低木で、高さは1・3メートルになる樹皮は灰褐色から茶褐色で、リボン状に縦に剥がれ落ちる。

若い樹皮は灰褐色で縦に筋が入る。若枝は赤褐色をしている。花期は5・6月頃。

葉は枝に対生し小枝の先から総状花序を出して、直径3センチメートルほどの4



弁の白い花を5・10個つけて咲かせる。写真では、ウツギの特徴か徒長枝が見られる。この附近では、3ヶ所ほどのご家庭に庭木として植栽されている。なお、自生種は六甲山上や少し分りにくい場所だが武田尾でも見られる。

## 1 3. マルバヤナギの柳絮 (りゅうじょ、りうじょ)

ヤナギ類ご承知のように雌雄異株、早春、通常葉が出る前に花をつける。雌株は、花のちに実を結びそれが乾燥すると裂けて、綿毛でおおわれた多くの種子を風により飛散させる。5月ごろがには開裂し綿毛の付いた種子散布を風に委ねる。これが柳絮と呼ばれているもので、風にのって運ばれてゆくさまは雪が舞うようでも、羽毛が舞うようでもある。ヤナギ類のこの様子は、春から初夏にかけての風物詩にもなっており、上高地のケショウヤナギなどは有名である。種子は、水分などの条件が良い場所に定着できれば、数日で発芽すると言われる。

右の画像は、近くの仲の池緑地の岸辺に、今年初めて結実、果実が開裂し柳絮が出現した様子である。果序の数、果実の数・普通ではない。こ



の樹は、緑地内にあり、樹自体も今年始めて結実したもので大きな株でもないので問題は無いであろうが都市部にあっては一般には「公害」扱いとされる代物である。今はどうなっているか知らないが、中国「北京の柳絮」の汚染公害は有名であった。ヤナギ類と書いたが「柳」ではなく「楊」系、ポプラやヤマナラシ類は大木となるのでその害も大きく、万博公園では過って存在した「カロリナポプラ」の雌木は伐採され、ソラード周辺の「ギンヨウハコヤナギ(ギンドロ)」は雄株のみの植栽となっているのはこの理由による。なお、六甲山上の「ヤマヤナギ」は雌木もあるのが見られる。

#### 1 4. 園芸種の逸出拡大？

紙面があまったので…当初は、園芸種として移入されたが逸出し野生化した植物について本報でも樹木系2種を記載したが、草本類でも多くなっている。この一因は、家庭の庭からの移出もあるが、最近市は高齢者対策なのか補助で道路脇などの空き地の「花園」化が進められて来ている。中には、自治会主体でよく管理された「花園」もあるが、有志主体で今や放置状態に近い「花園」などもあり逸出やすい状況ともなっている。これ等を含め、この附近で良く見られる野草？の画像を並べておきます。



上段はアカバナ系、黄色の花はコマツヨイグサ、いつの間にかマンションの小公園に侵入。

下段はキキョウソウ（ダンダンギキョウ）と右はヒナキキョウソウ、キキョウと同じく雄性先熟であることが判明したので挙げておきました。ヒナキキョウソウ、ハタケニラの拡大、新顔としてイワダレソウやムラサキツユクサなどの野生化も見られますが略します。

本報はこれまでとしておきます。

以上